四季を奏でる

上村松園《上苑の春》1910(明治43)年頃

旧吉澤野球博物館
収蔵美術品を中心に

令和6年度 船橋市出張美術展

会期 2024年 6月22日(土) – 7月3日(水)

9:00～17:00
最終入場 16:30
月曜休館

入場無料

会場 船橋市郷土資料館3階 第2展示室

主催 船橋市教育委員会

船橋市バーチャル美術館
展覧会・イベントの情報を掲載中!

船橋市所蔵作品レポート

- 上村松園《上苑の春》
- 鏑木清方《吹けよ河風》
- 作者不詳《風俗図 「団居」「四美人」「出待」「観劇」「温習」「幕間」》

作品レポート 1

上村松園《上苑の春》

1910 (明治 43)年頃　絹本着色　47.0×55.5cm

上村松園の女性像と四季の表現

野川 愛結実 （船橋市教育委員会 学芸員）

右手を胸の前まで挙げ、体をやや右に傾けて首を巡らせる一人の女性。その視線の先には淡い色彩で描かれた枝垂桜の枝先が揺れている。

作品名である「上苑」とは、天子(国の君主、天皇)の庭園を意味する。つまりこの作品は天皇家や公家の邸宅にある春の庭園の様子を描いているのだろう。女性が、貴族の化粧の一つである殿上眉をしていること、また頭部には櫛と梅の簪をさし、加えて鮮やかな衣裳を身に着けていることからも、高貴な身分であることが伝わってくる。しかし、絵の中の女性は気品だけでなく、目元を細めて僅かに微笑む姿からは少女のような可憐さも感じる。桜と人物のみのシンプルな構成ながら、花見を楽しむ女性の表情や仕草は、柔らかい陽の光や花の香りまで伝えてくれる作品である。

作者の上村松園(1875-1949)は、明治から昭和期にかけて活躍した京都出身の日本画家である。幼少より絵を好み、京都府画学校入学後は鈴木松年(1848-1918)、幸野楳嶺(1844-1895)、竹内栖鳳(1864-1942)に師事して絵を学ぶ。松園はとりわけ美人画の分野で才能を発揮し、1944 (昭和 19)年には帝室技芸員、そして 1947 (昭和 23)年には女性初の文化勲章を受けるなど、近代の日本画壇を代表する画家としての地位を築き上げた。

松園は、江戸時代や同時代の風俗、また古画や謡曲・能楽などからも着想を得て、様々な女性の姿を描いた。その作風は日本・中国の古画の模写や人物のスケッチを土台としつつ、時には浮世絵や近世絵画の構図を引用し、知的な女性像や母性溢れる女性などを繊細な筆致で表現している。

また松園は、同じ構図を使用して、異なる作品を手掛けることもあった。本作にも、いくつかの作品と構図上の共通点が認められる。例えば、1941 (昭和 16)年の《汐くみ》(岡田美術館蔵)に描かれた全身像の女性は、胸の前まで挙げた右手や振り返る姿などが《上苑の春》に類似しているといえるだろう。「汐汲」とは、平安時代の歌人・在原行平が須磨の浜辺で出会った松風と村雨という海女の姉妹を題材とした、能楽に由来する歌舞伎舞踊・長唄の演目の一つである。松園自身も舞踊の「汐汲」を題材とした作例について「《汐くみ》は私としては相当に苦心を費やし、努力を払うた作品でございます。」

(『青眉抄その後』大正 12 年)と言及していることからも、思い入れの強い題材であることがわかる。また先行研究によると、松園は「汐汲」の構図に鳥居清長(1752-1815)《風俗東之錦・汐汲》(東京国立博物館蔵)のような同主題の浮世絵を参考にしていた可能性が示されており、松園がこうした構図を好んで用いたのは、古画学習が背景にあることがわかる。こうした古画学習や作品の延長線上に、《上苑の春》のような作例が生み出されたのかもしれない。

しかしそれだけではなく、《上苑の春》には細やかな工夫がこらされている。改めて作品をよく見つめてみると、女性の髪にわずかに光沢感があるのだ。おそらくは日本画でもたびたび用いられる、雲母のような画材が塗布されているのだろう。

では、なぜそのような表現をしたのだろう。これは勝手な想像だが、松園は女性の美しい黒髪が春の光を浴びてきらきらと輝く様子を描きたかったのではないだろうか。

桜のほころぶ様子を見つめる女性の喜びと、絵の中の女性に向けられた松園の優しい眼差し。四季の美しさと共に、絵を取り巻く人々の想いへと向き合わせてくれる、《上苑の春》はまさに松園の美人画の魅力を詰め込んだ作品なのだ。

【作品リンク】

- 鳥居清長《風俗東之錦・汐汲》江戸時代(18 世紀)、東京国立博物館蔵
  https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0078087
- 上村松園《汐くみ》1941 (昭和 16)年、岡田美術館蔵
  https://www.okada-museum.com/collection/japanese_painting/japanese_painting10.html

【主要参考文献】

堀宜雄、増渕鏡子編『福島民報創刊百十五周年記念　上村松園―近代と伝統』上村松園展実行委員会・福島県立美術館・福島民報社　2007 年

廣海伸彦「上村松園研究の一断章―晩年期における歌麿大首絵の遺響」『出光美術館研究紀要』14、出光美術館　2008 年

竹川良子「上村松園が描く女性像に関する一考察　―明治・大正期を中心に―」『芸術学研究』3、京都造形芸術大学芸術学研究室　2010 年

上村松園『上村松園全随筆集　青眉抄・青眉抄その後』求龍堂　2010 年

宮川謙一編『上村松園・松篁・淳之三代展　～近代が誇る女流画家とそれに連なる系譜』東京富士美術館　2020 年

作品レポート２

鏑木清方《吹けよ河風》

1933(昭和 8)年　絹本着色・金泥　124.3×36.1cm

鏑木清方と佃節

出口 眞結　（船橋市教育委員会 学芸員）

紅葉した楓の葉がさやめく音や、吹きすさぶ雪風が空気を切り裂く音。本展覧会を巡っていただき、四季を彩るさまざまな調べと出会ったことだろう。ここで鏑木清方(1878-1972)《吹けよ河風》をご覧いただきたい。画面の外で弾ける花火から、パチパチと火の粉が舞い散る音。肌を撫でる夜の涼やかな風の音。そして屋形船の中からは、こんな声が聞こえてくるかもしれない。

吹けよ川風　あがれよ簾　中のお客の顔見たや

これは隅田川で行われていた舟遊びで演じられていた「佃節」の一種だ。芸者が三味線の旋律に合わせて佃節を朗々と唄いあげ、宴席を盛り上げていた。もとはローカルな遊び唄だった佃節は、歌舞伎の演目に取り入れられて以来多くの歌詞が作られ、隅田川の象徴のひとつとして伝わった。幕末から明治に活動した初代三遊亭円朝(1839-1900)も自身の体験から佃節について述べている。[1]　本作品を描いた清方は、彼の父・條野採菊(1832-1902)の友人であった円朝と深い親交があった。採菊が創刊したやまと新聞には、円朝の語る落語の速記が連載されており、清方も速記の現場に同席していたことを随筆に残している。[2]　円朝のように江戸から続く風情を知る年長者に囲まれて育った清方は、その過程で知った佃節の一節を本作品の題名としたのだろう。

清方は日本画を制作するにあたり、江戸時代の浮世絵からしばしば着想を得ていた。特に鳥居清長(1752-1815)の描いた《橋下の涼み舟》を高く評価していた。そうした影響から、清方は生涯でいくつか隅田川の風景を描いている。自身が目にした浮世絵や版本をもとに、江戸の情景に思いを馳せて絵筆を走らせたのだろう。本作品で芸者が乗っている「川一丸」という船も実際に運用されていた屋形船の名称であり、当時の文献に親しんでいたことが伺える。また、本作品と同じく隅田川での舟遊びの様子を描いた

[1] 三遊亭円朝「堀の青柳」(三遊亭円朝(述)ほか『円朝全集』第 13 巻　284 頁　岩波書店　2015 年)

[2] 鏑木清方「やまと新聞と芳年」(『こしかたの記』47 頁　中央公論美術出版　1961 年)

《墨田河舟遊》(東京国立近代美術館蔵)を第 8 回文展に出品したときの記録にて、清方は隅田川に寄せる思いを下記のように残している。

> 構想は、まだ濱町河岸に住んだ頃から懐かれてゐた。私の家の格子を開ければ、間近くそこに大川が流れる。(中略)屋形船を浮かべた隅田川は絵に見るだけで知るよしもないが、いろいろな船のゆきゝはその頃とてもかはりはなく、流れの水は元の水ならずとも、幻想を誘ふには十分であつた。画中に収めた船でも、大きい屋形船のほかは、まだいつでもこの川筋を日ごとに上り下りしてゐた。[3]

自宅の窓から行き交う屋形船の姿を目にし、自身の持つ江戸の書物を読み解き、清方の脳裏にはかつて在った江戸の幻想が育まれていたのだ。時をへだてて本作品と相対した皆さまも、吹けよ川風――と心の中で奏でてみてはいかがだろうか。

【作品リンク】

- 鳥居清長《橋下の涼み舟》江戸時代(18 世紀)、東京国立博物館蔵
  https://www.tnm.jp/modules/r_collection/index.php?controller=dtl&colid=A10569.792X
- 鏑木清方《墨田河舟遊》1914 (大正 3)年、東京国立近代美術館蔵
  https://www.momat.go.jp/collection/j00026

【主要参考文献】

竹内有一「近世邦楽の描く江戸の名所　――<佃>を中心に――」(『比較日本学研究センター研究年報』創刊号　45-52 頁　お茶の水女子大学比較日本学研究センター　2005 年)

宮崎徹『鏑木清方　江戸東京めぐり』　株式会社求龍堂　2014 年

鎌倉市鏑木清方記念美術館『鏑木清方と江戸の風情』　千葉市美術館　2014 年

菊池貴一郎『江戸府内　絵本風俗往来　新装版』　有限会社青蛙房　2015 年

三遊亭円朝(述)ほか『円朝全集』第 13 巻　岩波書店　2015 年

毎日新聞社『没後 50 年鏑木清方展』　毎日新聞社　2022 年

[3] 鏑木清方「大正のあゆみ(二)」(『こしかたの記　続』29 頁　中央公論美術出版　1967 年)

作品レポート 3

作者不詳《風俗図「団居」「四美人」「出待」「観劇」「温習」「幕間」》

制作年不詳　絹本着色

作者不明の作品の意義とは―宮川長春の作品との比較―

飯田 智子 （船橋市教育委員会 学芸員）

本展覧会では、《風俗図》と題された作品が展示されている。落款印章はなく、所蔵歴も定かではない。旧蔵者の吉澤氏が表具を新装したという記録が残るばかりで、作者は不明。

ただしこの作品には、江戸時代中期に活躍した浮世絵師・宮川長春(1682～1752)が描いた東京国立博物館蔵《風俗図巻》、徳島城博物館蔵《風俗図巻》の 2 点と酷似する図像が見られる。裏に作品画像が掲載されている。ご覧になりながらお読みいただきたい。

元となったと思しき作品があるという事実を以て、ある作品を模造品であると断定してしまうのはたやすいが、作品として存在している以上、誰かの思いによって今に残っているのも事実である。価値の高低を決めるのではなく、作られるに至った経緯を追うのも美術に関わる上での楽しさの一つである。このレポートでは、長春という絵師に注目し、本作品の位置づけを考えてみようと思う。それにはまず浮世絵というものをご理解いただく必要がある。

皆様は浮世絵と聞いて一番にどんな作品が思い浮かぶだろう。

葛飾北斎(1760-1849)の《神奈川沖浪裏》か、それとも歌舞伎役者の顔を大きく描き出した東洲斎写楽(生没年不詳)の大首絵か。いずれにしても、浮世絵として広く世に知られる作品は木版画が主流なのではないだろうか。しかし、実は浮世絵には上記のよく知られた版画作品だけでなく、長春筆の作品のように肉筆、つまりは絵師が手描きをした作品がある。そして、両者とも浮世絵を語る上では重要な形式である。

浮世絵は安土桃山から江戸時代にかけて流行した風俗図や活版印刷本の挿絵の流れを汲む日本絵画のジャンルの一つで、天和年間(1681-1684)に成立した「浮世＋絵」の造語である。「浮世」とは定めのない世の中、転じてそんな儚い世ならむしろ浮かれて生きようという意味を含んだ言葉、また花街や芝居町のこと。つまり、浮世絵とは当時の流行を追い、俗世間を写した絵、また遊郭・芝居町やそこに息づく遊女・役者を描いた絵の総称なのである。

手法としては、前述のとおり絵師が直接筆を取った肉筆画と、絵師の描いたものを版木に写して大量印刷をした木版画の 2 種類あり、武家・公家を主要な享受者層とする狩野派や土佐派とは異なって、町人など当時の庶民階級の人々にまで広く受け入れられた絵画様式だったといえる。

浮世絵の祖というと《見返り美人図》の作者・菱川師宣(1618-1694)がよく知られるが、長春は「浮世絵」という語の誕生した頃に生を受け、祖・師宣をはじめとする浮世絵草創期の絵師の影響を色濃く受け継ぎ、それを次代に引き継いだ人物であった。

一方で師宣が版画の下絵も制作したのに対し、長春は肉筆画のみを手掛けたとされ、前述のような図巻の風俗図の他に遊女を大きく描き出した画軸など多彩な形式の作品が現代に伝わる。《風俗図巻》に注目して調べてみると、徳島城博物館所蔵作品と類似する絵は泉屋博古館などにもあることが分かった。この他にも長春自身、図像を同じくする絵を制作しており、注文を受けてから制作に取り掛かるスタイルよりは、ある程度図像を使い回して制作活動を行っていたと考えられる。

また、長春には弟子も多く、長亀・一笑・春水などのいわゆる宮川派の絵師を輩出している。彼らは師の画風を継承しつつ独自のアレンジを加えることで差別化を図っていたようである。このように引き継がれた宮川派の画系は春水から勝川春章(1726-1793)へ、春章から葛飾北斎へと続き、幕末まで至ることになる。

改めて、本展覧会の作品に話を戻す。

長春の作品と比較してみると、人物や物の配置、肢体の動き方がほぼ合致していることがお分かりただけるだろう。さらに、衣装の皺の付き方まで同じ箇所がある。ここまでの合致があって関わりがないとは言えまい。一方で、作品の異なる部分にも注意を払わなければならない。人物の顔貌は長春とは異なり、また③「出待」の装束がかけられている物干し竿の形状やその他細かい小物の配置や着物の文様に違いがある。いわゆる「写し崩れ」である。この共通点と相違点を鑑みるに図版の長春の作品に直接影響を受けたというよりは、両作品の間に少なくとも１つ以上の作品が関係していると考えられる。

これはあくまで推測にすぎないが、本作品は長春の風俗図巻が近縁の絵師により模写され、それが各地に広まったことにより描かれた作品の一つなのではないか。そして、両作品の着物の色合いに類似点が見られることや画面の状態から展示作品がもともと巻子形式であったとみられることから鑑みるに、出版本などではなく、長春からこの作品に至るまで、肉筆画の風俗図巻が連綿と書き写されていた可能性がある。同じ図像を繰り返し利用していたとはいえ、版画に比べれば肉筆画の制作には労力が必要となるはずだ。つまり、本作品は宮川派の図像がどれほど広範囲に伝播していたか、また、版画ではなく肉筆画という形式で親しまれたものであったことを示す証拠の一つにもなりえるのだ。分からないことばかりの作品でも、類似作品やその細かい相違点を洗い出すことで、作品が制作された当時流通していた絵や制作に携わった人々が目にするものに思いを馳せることができるのである。

加えて、展示作品には長春の作品には見られない豪華な軸装が施されている。「分からないからつまらない」で終わらせず、作った人と作らせた人、そして持っていた人の作品に対する思いを想像しながら、楽しんで本展覧会をご鑑賞いただきたい。

【主要参考文献】

楢崎宗重編『日本の美術　第 248 号　肉筆浮世絵 I (寛文～宝暦)』　至文堂　1987 年

小林忠『日本の美術　第 363 号　師宣と初期浮世絵』　至文堂　1996 年

稲塙朋子「宮川長春と宮川派の享受者層の考察」(『浮世絵芸術 157 号』)国際浮世絵学会　2009 年

『特別展　宮川長春』　大和文華館　2013 年

徳島市立徳島城博物館所蔵　宮川長春筆《風俗図巻》

《風俗画①「団居」》類似部分　《風俗画⑤「温習」》類似部分

徳島市立徳島城博物館所蔵　宮川長春筆《風俗図巻》

《風俗画⑤「温習」》類似部分　《風俗画②「四美人」》類似部分

東京国立博物館所蔵　宮川長春筆《風俗図巻》

《風俗画③「出待」》類似部分　東京国立博物館所蔵　Image: TNM Image Archives

東京国立博物館所蔵　宮川長春《風俗図巻》

《風俗画④「観劇」》類似部分　東京国立博物館所蔵　Image: TNM Image Archives

発行：船橋市教育委員会 文化課 令和 6 年 6 月

住所：273-8501 船橋市湊町 2-10-25
TEL：047-436-2894
企画・編集：益子 実華 （船橋市教育委員会 文化課）
執筆：野川 愛結実・出口 眞結・飯田 智子 （船橋市教育委員会 文化課）